『ジオタグは後で付ける』発想の転換が可能にした究極のシステムは瞬時に衛星データを取得し抜群のバッテリーライフをもたらした！

真っ暗闇のオーロラ撮影でも、後から撮影場所を特定することができる。

ジオタグの楽しみ方

ここ数年、カナダのユーコン準州を訪れ広大な風景や野生動物、オーロラなどの撮影を楽しんでいる。帰国後、膨大な量の写真を整理するのだが、日付毎にフォルダで管理するのは皆さんと同じ。お薦めしたいのは、写真をグーグルアース上で共有するという楽しみ方だ。

グーグルのサービス「パノラミオ」に写真を投稿、審査をパスするとグーグルアース上の撮影ポイントに自分の写真が表示される。世界中の誰かが写真を見るとカウントが上がり、気の利いたコメントが届けられる。自宅にいながらにして、同じ感性を持った仲間とコミュニケーションが取れる。時には誰かが撮影した写真を一枚一枚鑑賞しながら、遠くの撮影地に思いを馳せる。これが僕のグーグルアースの楽しみ方だ。

審査をパスする上で重要なポイントは、大雑把で良いのだが撮影場所を特定できることだ。投稿する時に地図を見ながらマニュアルで撮影場所を特定することもできるが、便利なのがジオタグだ。ジオタグは、デジタル画像データにある Exif ファイルに位置座標を書き込む技術だが、今まではハンディGPSのログデータをソフトを使ってマッチングさせていた。必要な条件は、カメラの時間とGPSの時間が同期されていること。ソフトでマッチングさせることも可能だが、海外の場合は時差もあり結構面倒なのだ。

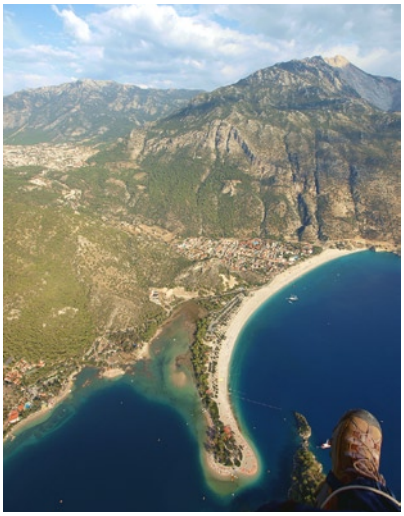
連なる山間を飛行するセスナから氷河を撮影。移動速度が速い条件でも確実にキャプチャーしてくれる。

似たような風景が延々と続くユーコンの荒野。GPSのバッテリー残量を気にすることなく撮影に集中できる。

2010 年の春、コンパクトデジタルカメラにGPSを搭載してジオタグがリアルタイムで付けられる製品が何点か登場している。デジタル一眼レフカメラで搭載している製品はないが、唯一ニコンがオプションでGPSユニットを用意している。煩わしい作業から解放されて、撮影時にカメラ内で簡単にジオタグを付けられる。

ところが良いことばかりではない。GPSの捕捉時間がかかることと、GPSの電源をカメラのバッテリーから得ているのでスタミナの点で問題がある。また一眼レフの場合は、後付けの配線が邪魔になってしまう。

さらに撮影時にデジタルカメラ自体が出す微弱電波が、衛星からの電波受信を妨害してしまう。逆に撮影データにもノイズが出てしまうということもあるようだ。



パラグライダーで地中海の上をフライト。もうGPSの捕捉状況を気にする必要はない。

小貝哲夫（こがい てつお）
1960 年東京都生まれ。フォトライター。体育大学体育学部卒業後、海外青年協力隊に参加し世界の広さを知る。帰国後パラグライダー販売業の傍ら、世界中を旅する。1999 年フリーランスとして独立、自らを人生、興味、趣味の中を旅する「Traveler」と称し、その交差点で仕事をするというコンセプトの「CROSSROAD」を主宰。パラグライダー専門誌を中心にアウトドア、旅、もの、レスキュー、ミリタリーなど広い守備範囲のフォトライターとして活動。

大木に囲まれた境内でも、高い精度でジオタグを付けてくれる。たとえ10mずれていても、地図上で撮影場所を特定できるメリットは大きい。

EVK−CK キャプチャー&プロセス評価キットとの出会い

まだまだ時期尚早なのか…とネット検索で見つけたのがu-blokのEVK−CK（キャプチャー&プロセス評価キット）だ。使い方は簡単。USBで充電したキャプチャー・デバイスを一眼レフのホットシューに取り付けて、好きなタイミングで撮影するだけ。ホットシューに装着した時点でデバイス側の準備が完了、シャッターを切る度に本体のLEDがグリーンに点灯してデータが記録（キャプチャー）される。

当初は全くEVK−CKのシステムを理解できなかった。と言うのは、僕の頭の中は、「GPS＝リアルタイム」という考え方が支配していたからだ。リアルタイムで衛星を捕捉し続けたのでは、10数時間で電源が切れてしまう。かと言って、撮影の時だけGPSの電源を入れたのでは、測位までの時間が掛かりシャッターチャンスを逃してしまう。近頃のGPSチップは性能が向上したと言っても、3〜4個の衛星を捕捉して正確な位置情報を得るには最低でも30秒ほどの時間が必要だ。

ところがEVK−CKは、シャッターを切る度に衛星からの原信号だけを記録していく。従来のGPSロガーと根本的に違うのは、この時点で正確な位置情報は記録されておらず、一枚の画像と衛星の原信号データが対になっているということ。

帰宅後、付属ソフト「Taggr」を立ち上げ、GPSデータを読み込ませると自動的にu-blox社のサーバーにアクセスして蓄積した各衛星の軌道情報と照合して位置情報を付けていく（ヒストリカル・オンライン・サービス）。次に画像データを読み込み[Tag Photos]をクリックすると、順次ジオタグが付けられていく。操作はとてもシンプルで簡単だ。

もうひとつ、EVK−CKの大きなアドバンテージがある。一枚につき0.2秒ほどしか作動しないので、一回の充電で最大2000枚のキャプチャーが可能で4週間程度のバッテリーライフがある。またキャプチャーのタイミングを任意で設定できるので、発生する電磁妨害の可能性を回避することもできる。

ハンディGPSやGPSロガーにこだわる余り、ジオタグもリアルタイムが当然と思い込んでいたが、撮影者にとってリアルタイムにジオタグを知る必要は全くない。一番大切なことは、撮りたいタイミングでシャッターを切れること。ジオタグは、写真を整理する時段階で付いていれば良いのだ。

ジオタグは、リアルタイムGPSである必要は全くない！

携帯電話にはGPS機能が搭載されているが、リアルタイムのハンディGPSとは根本的な部分で異なる。携帯電話のGPSはA−GPS（アシスタントGPS）という考え方で、基地局から得た衛星の位置情報を元に自分のいる位置を特定している。だから携帯電話が通じない山中では、A−GPSは機能しない。

EVK−CKはどちらかと言えばA−GPSのバリエーションに属するのであろうが、後で位置情報を付加させるという点では類似するシステムがないだけに、ジオタグを付ける専用機として特別な呼称が必要になるだろう。

GPSを使った経験があれば当然のことだが、室内で衛星を捕捉することはできない。入室の前に屋外で本体横のボタンを押してキャプチャーを行っておけば、更新されない限り前回のキャプチャーが適応される。こんな使い方を知っていれば屋内でもそれなりにジオタグを付けることができる。しかしGPSと謳った瞬間に『携帯電話では室内でも位置情報が分かるのにこれは使えない！』となってしまうだろう。

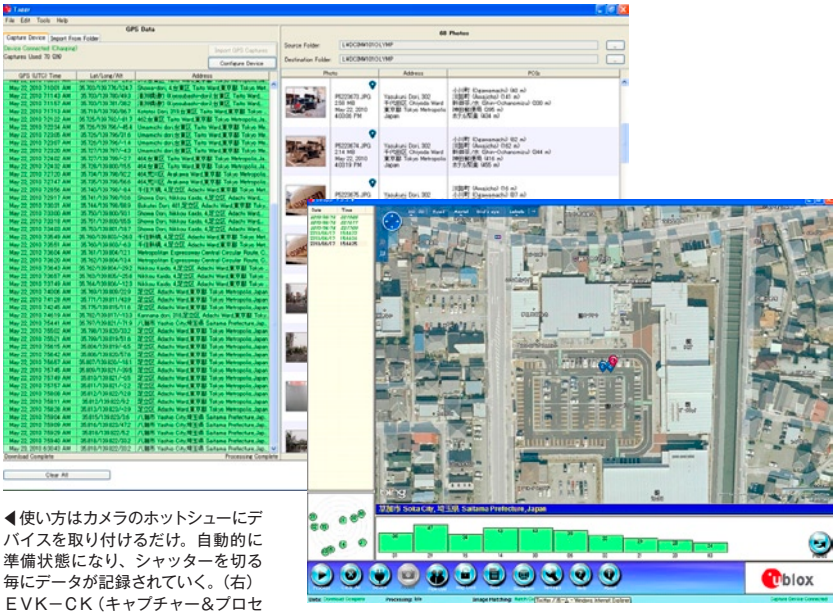
u-bloxの製品は感度が抜群に良いので、ビルの谷間や谷間、木陰でもおおよその位置を得ることができる。いろいろと実験をした結果では、天空が開けている場所で本体上面をしっかり上に向けていれば、高い精度でジオタグを付けてくれる。現在のEVK−CKは、キャプチャーデバイスをホットシューに装着して使用するが、このデバイスをデジタルカメラに内蔵すればもっとシンプルでジオタグが身近な存在にある。

ジオタグを付ける時にパソコンとインターネット環境が必要なことと、ジオタグをリアルタイムに確認できないというデメリットがあるが、カメラを向けた瞬間にシャッターを切れるストレスフリーな使用感とずば抜けたバッテリーライフはネガティブな側面を払拭する大きなメリットである。

ジオタグは後から付ける。カメラメーカーはこのメリットに早く気が付き、標準装備した製品を世に出して欲しい。誰でも簡単にジオタグが付けることができれば、写真を通じたコミュニケーションの輪が広がり、多くの仲間と感動を分かち合うことができる。

ジオタグが作る新しい世界に大いに期待している。

◀使い方はカメラのホットシューにデバイスを取り付けるだけ。自動的に準備状態になり、シャッターを切る毎にデータが記録されていく。（右）EVK−CK（キャプチャー&プロセス評価キット）の内容は、KATOキャプチャーデバイス、ホットシューコネクター、アダプター（ソニー／コニカミノルタ対応）、USBケーブル、インストール用CD、専用ケースからなる。（左）



▲付属ソフト「Taggr」は、左側にGPSデータ、時間／座標／大まかな住所を表示。右側に画像とファイル名、サイズ、撮影日時が表示され、住所や周辺のスポットが表示される。周辺スポットは、駅や公園、ホテル、飲食店などから自由に設定できる。（奥）
付属ソフト「Snappr」は、キャプチャーしたデータの処理結果を表示するソフトで、捕捉した衛星の位置や電波の強さも表示してくれる。（手前）